



魅惑の隣花

〈三者三艶の女達 美熟OL、童顔JD、セフレJK〉

小日向諒

目次

- 一章 片恋相手はセックスフレンド
- 二章 美熟オフィスレディと淫靡な密約
- 三章 童顔女子大生の逆連れ込み
- 四章 幼馴染み女子高生は彼女
- 終章 三者三艶の女達

一章 片恋相手はセックスフレンド

脳裏に巢喰っていた夏休みボケが中間試験の襲来によって叩き出され、新学期としての日常と平穏が学生達にもたらされ始めた、ある初秋の午後。

試験期間中の校舎に遍く蔓延する、あの独特の緊迫感から解放された滝川洋一は、聖域たる自室でまったりとした憩いを堪能していた。

制服を脱ぎ、ベルトを必要としないハーフパンツと襟周りが楽なTシャツに着替えると、何をするわけでもなく漫然と仰向けになる。慣れ親しんだベッドが、部活動によって鍛えられた筋肉質の背中を柔らかくに受け止めた。

(誰にも邪魔されずにぼんやり出来るつてのは、中々贅沢だよなあ。やっぱ)

兄弟姉妹が家にいるからゆっくりできないと嘆く友人もいるが、一人っ子である洋

一にその種の不満はない。平日であれば共働きの両親が出払っているので、人目を憚ることなくこうして無為の時間を楽しめる。

もつとも、そんな怠惰極まる青春の無駄遣いは、突如として開け放たれた扉によって、ものの数分と経たずに終わりを告げた

「おわっ」と、素っ頓狂な叫び声と共に、バネ仕掛けの人形よろしく洋一は大慌てでベッドから飛び起きる。

中学の時分にバスケの虜となり、現在通っている斎美市立高校でもバスケ部に所属しているだけあって、洋一は同年代の男子より身長が高い。

高校二年生でありながら背丈は175センチを超え、体育会系の学生だけあって全身に隈無く筋肉が付き、体格もがっしりとしている。

半端な成人男性と比べてもよほど屈強な洋一だが、親が不在で弛緩しきっていたところで何の予兆もなく自室の扉が開かれたのだから、驚愕するのも無理はない。

「お、お前か——つたく……脅かすなよ。真奈美」

幸いにして、闖入者は空き巢・強盗の類ではなく、向こう隣に住む御近所さんにして、同じ年の幼馴染みである武藤真奈美であった。

見慣れた武藤家の次女を視認し、早鐘を打っていた脈が急速に沈着していく。

洋一は安堵の溜息と共に、浮きかけていた腰をベッドに戻した。

「あのなあ、幾ら昔からの付き合いとはいえベルくらい鳴らせよ。高校二年にもなつて、親しき仲にも礼儀ありつて言葉を知らないのか」

「鍵っ子のクセに玄関の施錠を疎かにしているのがいけないのよ。第一、こんな怠惰な防犯意識をおばさん達に知られたら、洋一。困るのはそっちじゃない？」

道理を論拠にして常識を論ず洋一だったが、相手は自分の非を認めないどころか、逆に重箱の隅を突くようにして、巧みな反撃を成功させる。

したたかな外交手腕に洋一が忌々しく眉根を寄せると、真奈美は勝者の余裕とばかりにくすりと微笑んだ。

白くなめらかな繊指に艶やかな黒髪が絡み、華麗に耳朶へと流される。

(一つ一つの所作が様になる奴だ)

物心付いた時から見知っており両家が目と鼻の先であることから、洋一にとって真奈美は半ば兄妹も同然だ。互いの部屋をセカンドハウスさながらに行き来する間柄だが、その優れた容姿の所為で何気ない仕草でもつい魅入ってしまう。

凜とした美少女——武藤真奈美という少女について一目見て述べるなら、概ね皆このような類似表現に収斂される。

その要因の筆頭として挙げられるのが、強い意志を帯びた双眸だ。

クラスの女生徒を始めとした同年代の少女達が、周囲から可愛がられたいとかりに振りまく愛嬌など、この美少女には微塵も無い。代わりに、涼やかな静謐を虹彩の奥に湛え、毅然とした貌で真っ直ぐ相手を見つめてくる。

ともすれば無愛想とも取れるであろうその素顔は、しかし、母親譲りの美貌によって清廉な麗しさとして成り立っていた。

しおらしい曲線を描く鼻梁や薄く透明感のある桜唇は、十七歳の女子高生としての瑞々しさを強調している。肘まで届く濡れるような黒髪は小綺麗に後ろで結わえられ、白いうなじを浮き立たせていた。

162センチのすらりとした背丈は最近とみに女らしい丸みを帯びてきており、制服のブラウスは胸の膨らみによってややきつめの稜線を引いている。

特に目立つのは、ミニスカートから伸びたしなやかな美脚だ。黒いオーバーニーハイソックスに彩られる華麗な脚線は、程よい肉付きと日本人離れした腰の高さもあって、殊更に麗姿を映えさせた。

「鍵かけてなかったのは事実だが……真奈美。お前、大きな勘違いをしてるぞ」

「ふうん、そう？ 愉快的言い訳だったら、この失態は私の胸に仕舞ったままにして

おいてあげる」

十七歳の少女は後ろ手に扉を閉め、手にしていた学生鞆を壁に立てかけた。斎美市立高校の夏服の特徴でもある薄水色のプリーツスカートを翻し、しなやかな足取りで部屋を進むと、パソコンチェアを引き寄せ小振りの桃尻を載せる。

健康美溢れる女子高二年生の脚が、すらりと典雅に組まれた。オーバーニーハイソックスの黒と、脚肌の白いコントラストが実に眩しい。

「俺はな、鍵を閉め忘れたんじゃない。わざと鍵をかけなかったんだ」

「政治家の釈明より面白みが無いなんて、がっかり。洋一って、悪い意味で才能に満ち溢れているんじゃない？」

パソコンチェアに座ったまま、真奈美はキャスターを転がしてベッドへと近寄ってくる。曲げられていた脚がスツと伸ばされ、爪の透ける黒い足先が洋一の膝頭に触れた。汗でしっとりとした脚がスツと伸ばされ、爪の透ける黒い足先が洋一の膝頭に触れた。汗でしっとりとした脚がスツと伸ばされ、爪の透ける黒い足先が洋一の膝頭に触れた。

男部屋に似付かわしくない華やかなコンディショナーの香りが、ふんわりと長い黒髪から漂った。

「ところが本当なんだな、これが。スパイよろしく我が家に侵入してくれたのはご苦労だったが、俺はこれから出かけなきゃならん。じゃあな」

「えっ——ち、ちよつと待ちなさいっ」

昔馴染みの関係を免罪符に掲げ、不法侵入にも悪びれることなく我が物顔でいた真奈美に大きな動揺が走る。凜とした美少女像しか知らない同級生が見たら、真奈美以上に仰天したであろう、激しい当惑だった。

「この間ちゃんと約束したじゃないっ。テストの最終日は予定空けておく——っ」
「俺だって久々なんだ。忘れるわけないだろ。まあ、話を聞け」

迫るだけに留まらず、そのまま胸座を掴みかねない真奈美を宥めんと、背を反らしつつ洋一は急いで弁解をする。

約束を履行する意志はあるとわかったのか、少女は浮きかけていた腰をチェアに戻し、ついでに双眸も座らせた。

「……それで、何処に行くの。帰ってくるのにどれくらいかかるの」

「マツヤマ。チャリで行くから、一時間くらいで帰って来れるだろ。コンビニでも良いんだけど、近場だとちよつと——な」

町境にある大型ドラッグストアの名が挙げられると、真奈美は呟く様に「マツヤマ……」と小さく反復した。洋一の目的を理解して合点が行ったのか「あっ」と声を漏らす少女だったが、すぐにそれは不機嫌を隠そうともしない唸りへと変わった。

「もうっ、どうしてちゃんと残りの数を確認しておかなかったのよ。バカッ」

「いや、切らしているのはわかっていたんだ。ただ、テスト勉強で忙しかったからつい買い忘れて……すまん。俺が悪かった」

洋一は言い訳を途中で切り止めて頭を垂れ、両の掌を合わせ拝むようにして真奈美に謝罪の意を示す。

幾ら幼馴染みとはいえ、さすがに頭を下げさせたのはやり過ぎだと感じたのか。十七歳の美少女はばつが悪そうに視線を彷徨させた。

「テスト勉強で忙しかったのなら……仕方ないわ」

真奈美は洋一と違って単なる平学生ではなく、風紀委員の役に就いている。おまけに、最も倦厭されるこの口喧しい役職を進んで買って出た変わり者だ。

そんな生真面目な少女なだけあって、学生の本分が勉強であるときちゃんと理解している。洋一のミスに憤ったものの、自習を疎かにして私事を優先させろとはさすがに言えないらしい。

「んじゃ、ちよつと行ってくる。そのチャンプを読むなり、適当に準備だけするなりして時間潰していてくれ」

ベッドに無造作に放り投げられた今週発売の漫画雑誌を指さしつつ、洋一はベッド

から身を起こす。机に置いてあった革財布をハーフパンツのポケットへ捻じ込み、自転車の鍵を指に絡めて扉に手をかけたところで「待ちなさい」と、凜とした制止がかかった。

「まったく……仮にも私の偽彼^{モカシ}してるんだから、しつかりしなさいよね」

わざとらしく溜息を吐いた真奈美が、組んでいた美脚を解いた。

艶やかな黒髪を流して腰を上げた少女がスカートのポケットのポケットをまさぐり、クラツカ―サイズのアルミビニールを取り出す。

「予備として取っておいた、最後の一個。テスト期間中、ずっと我慢していたのよ。一時間も待ってられないわ」

包装されたコンドームを桜唇に咥え、真奈美は両手を後ろに回す。一つに纏められていた長い黒髪がふわりと広がり、ストレートのロングヘアが涼やかな滝となって流れ落ちる。男とは異なる女の汗が溶けた甘い匂いが、室内へまろやかに霧散した。

涎の付着したコンドームを白く清楚な繊指に挟み、真奈美の両手が制服のスカートを音もなく摘んだ。

「ほら……洋一。早くエッチしよう」

クラスの知り合いはおろか仲の良い友人も知らない、風紀委員の優等生を隠れ蓑に

した、洋一のみが知り得る裏の貌。

清廉な容姿からは想像も付かない、淫靡な艶を含んだ誘惑の声が、男の耳朵をねつとりと舐める。

スカートに隠されていた白いふとももと純白のショーツを露わにすると、洋一の幼馴染みにしてセックスフレンドである女子高生は、蠱惑を湛えた微笑みを零した。

洋一と真奈美の付き合いは、互いが幼児だった頃にまで遡る。

異性を意識する以前に、家族と友人の区別すら混然としていた時期から一緒だったこともあり、洋一と真奈美は双子の兄妹さながらに育った。

時には喧嘩も衝突もしたものが、年を重ね、互いに性差を意識し始めても、二人の距離は不変のままだった。第二次性徴を迎えれば幾ら幼馴染みでも多少は疎遠になりそうなものだが、洋一達は寧ろ奇妙な形で親密さに拍車をかけていく。

男女の性差が顕れる頃になると、クールな風采に似合わず好奇心旺盛な真奈美は「保体は教科書じゃわからない」と、洋一の勃起を直に見たがった。

言うまでもなく、洋一は拒んだ。しかし、母子家庭ということもあって男性器を目

にする機会が極端に少ない真奈美は、めげることなく熱心に頼み込んでくる。

当時、洋一は思春期の萌芽が出始めた頃だ。そう簡単に局部を晒せるはずがない。渋る洋一に「代わりに、私のおまんこも見せてあげる」と、真奈美はとんでもない交渉を持ちかけて来る。

性の恥じらいを持つと同時に、異性への興味が著しく湧いていた時期にそんな取引をちらつかされたら、雄の衝動が肥大するのは不可抗力に近い。

その色欲の火種は、瞬く間に肉欲の大火へと変貌していく。

性器の見せ合いは間を置かずして接触へと進み、やがて愛撫へと変化する。

射精も見せて欲しいと頼まれると、洋一も真奈美の自慰行為を暴露して貰い、やがてそれは互いを慰撫する手淫へと変遷を連ねていく。

若い情欲に駆られた二人がセックスに行き着くのは、単なる時間の問題だった。

青く未熟な性行為は、思春期の無尽蔵に近い性欲と肉欲の赴くまま、何回、何十回と繰り返される。一回ごとに洋一は性戯を磨き、真奈美の性感を開発させていく。

もつとも、恋愛に先んじてセックスをする違和感は、未成年である洋一も漠然と理解していた。ただし、それを理解していてもなお、セックスの官能は筆舌に尽くし難い魅力に充ちていた。

「お互い好きな人ができたら、セフレ関係は止めよ」

恋愛を包括しない背徳の性交には、真奈美も洋一と同じ結論に至ったらしい。

その意見に洋一も同意し、肥大していく肉欲に一定の制限を授けた。

洋一にとつて、真奈美は幼馴染みだ。どれだけ仲が良く、セックスに耽り、肌を許し合う親密さはあっても、恋愛感情は発生しない。

それは、何度肌を重ね合わせても洋一の中で変わることはなかった。

少なくとも——真奈美が高校に進学するまでは。

「あつ……はう、ん……っ」

ベッドの上で美しく淫らに咲き乱れた蜜花に、いきり立った獣欲を滾らせる怒張をずつぷりと嵌め込む。四つん這いになった真奈美がぶるりと瑞々しい肢体をおのかせ、悩ましい吐息が白い喉を震わせる。

卑猥な涎をたっぷり湛えた無数の贅肉が淫蕩に男根をしゃぶり、媚唇がひくひくと妖しく蠢く。

コンドームを介していても、淫らな歓待をしてくる贅肉の感触は子細に感じ取れた。

(いつもより遥かに気持ち良い。こりや、あんまり長くは楽しめそうにないな)
尿道を逆流してくる快感の波濤が射精衝動を煽情し、洋一の胤囊をグッと引き上げさせた。

テストに集中するため真奈美とのセックスは中断していたわけだが、一週間ぶりの肉交は快楽に飢えていた高校二年生の身体を過敏にしている。

遅々とした脱衣に我慢できず乱れた制服姿のまま真奈美を貫いた洋一は、股間から遡ってくる甘い快感に嬌声を上げそうになり、男のプライドを込めて噛み殺した。

「ちよっとしか愛撫してないのに……お前のまんこ、グチョ濡れじゃないか」

余裕を誇示するべく、美尻を隠していたスカートを掌で払いのけると、飾り気の少ない純白のコットンショーツが貌を覗かせる。清楚な彩り越しに尻肉を撫でると、あやかな繊維指が切なげにシーツを引っ搔いた。

「エロ汁も垂れまくりだし、子宮も降りてきてる。真奈美……お前、どんだけ発情してんだよ」

わざと卑猥に美尻を撫で回しつつ、洋一は剛直を浅くピストンさせた。結合部からぶちゆりと猥雑な水音が溢れ出し、濃密な愛液が染み出してくる。

男の部屋に、女子高生の甘酸っぱい情香がむわりと匂い立つ。その卑猥な香りを肺

一杯に吸い込んで堪能すると、男の下腹が野蛮な悦びに疼いた。

「んっ……仕方ない、でしょ。テスト期間に、生理が被ったんだから。あんっ」

単に禁欲を強いられただけではなく、月経で醸成された悶々たる欲求が運悪くのし掛かっていたらしい。

生理痛は軽いものの、代わりに性欲が著しく肥大すると真奈美から以前聞かされたことがあるので、洋一は心の裡で合点した。

「生理で辛いならオナニーくらいしろよ。幾らテストだからって、我慢の限界超えちまうと逆に自習なんて捗らないだろ」

程よい弾力と柔らかさが融けた臀肉を、洋一がぺちぺちといたぶるように叩くと、真奈美がお返しとばかりに膣圧を絞り込む。男根の根本がきつく搾り上げられ、洋一は「うおっ」と甘い苦しみに悶えた。

「う、っ……ん……したに決まってるでしょ。何回もオナニーしてたわよ。クリ弄くりまくって、生理まんこに指突っ込んで、掻き回して……ふぁ、んっ」

「呆れたヤツだな。それだけオナニーしまくってたのに、まだ物足りないのかよ。生真面目なクセに、ほんとお前ってエロいよな」

パンツ——一際勢いを付けて腰を打ち付けると、滑らかな丸みを帯びた十七歳の尻

朶がぐにやりと歪む。柔らかに蕩けて来た子宮口を、押しつけた亀頭でじっくり攪拌してやると「ああっ」と鼓膜の痺れる爛れた嬌声が奏でられた。

黒いオーバーニーハイソックスに透ける少女の足先が、のたうつ獣のようにシーツを乱暴に掻き乱す。

「当たり前でしょっ。おまんこが灼けそうなくらい疼いているのに、あんな指オナだけで満足できるわけないじゃないっ」

「へえ。つてことは、生理中ずっと俺にハメられることばかり考えていたわけか」ほんの数ヶ月だけ年下な長馴染みを、肉欲に乗じて言葉責めにする。

獣の体位で真奈美を犯していることもあり、男に刻まれている牡の衝動が美少女を加虐する悦びに涎を湧かせる。

「コンドーム買いに行く時間すら待たなくて、直結されたかったのはそういう訳か。淫乱なヤツだな。真奈美は」

「あっ、や——ひゃんっ」
興に乗った洋一は、半ずらしにされていたショーツをキュツと腰へと引き上げる。

媚唇をクロツチで圧迫され、菊門を布地で擦られた真奈美が甘い悲鳴を爪弾く。

「ええ、そうよ。この一週間、ずっと洋一とセックスすることばかり妄想していたわ。

このカチカチのおちんぼで貫かれたくて、夢にまで見たわよ。あんっ」

真奈美は一瞬だけ洋一を睨み付けたが、言い訳などしても徒労に終わると覚ったのだろう。朱に染まった頬をベッドシートに押しつけ、淫らな牝欲を赤裸々に吐露していく。

「だって、気持ち良いのっ。おちんぼでズブズブってハメられるの、指ですると比べものにならないもんっ。あっ、ふあんっ」

快楽に酔う美しい幼馴染みから、凜とした女子高生としての矜持が溶けていく。
十七歳らしからぬ舌っ足らずで幼稚な口調が、べったりと粘った蠱惑となって洋一の背を這い上がっていく。

「いつものクールな雰囲気なんて何処にも無いな。風紀委員の分際で、こんなセックス大好きの色狂いだって知られたら、お前に憧れている後輩なんて泣き出すぞ」

「あんっ、うるさあいっ。そんなのどうでもいいっ。んっ、ああ、そんなの、どうだっっていういから、もっと犯してっ。獣みたいに腰振りなさいよっ」

身体を股座から揺さぶられながら、真奈美は鬱積した色欲を吐き出していく。

清楚な風采とはかけ離れた野卑で食欲な渴望が、美少女に背徳の艶を宿らせる。

牡として希求される黒い悦びが、洋一の四肢に更なる活力を滾らせた。

「お望み通り犯りまくってやるよ。ほら、肘を曲げる」

「は、あ……おまんこ捲れて……んんっ」

ずるんと勢い良く腰を引き、愛液塗れの怒張を一旦外に抜き出す。

精囊から伝う濁った泡汁を滴らせつつ、洋一は振り返った怒張を下腹に張り付かせ、真奈美の背を前面へと押しつける。

肩を擦らせた女体がシーツの上を滑り、黒のオーバーニーハイソックスに透けた膝窩が露わになる。

俯せになった女体を洋一が跨いだ。踏ん張るように腰を降ろし、スカートを大きく捲り上げる。くっぱりと開いたままになっている牝穴からは、泡の交じった淫らな涎が垂れていた。

少女の媚股に亀頭の先端を宛がい、だらしなく愛液を漏出していた蜜穴に栓をする。

「お前の細い指とは比べものにならない、俺のガチガチに膨らんだ勃起ちんぼ、全力でブチ込んでやるよ。そらっ」

「あっ、んっ。あ、来たっ。洋一のおちんぼ——ああっ」

ふっくらと丸みを帯びてきた双臀を真上からひと撫でし、洋一は猛然と股間を叩き落とす。収束された荷重に耐えきれず、ベッドがざしりと耳障りな軋みを生じさせた。

鍛え上げた脹ら脛を張り詰めさせ、膝を小刻みかつ猛烈な勢いで屈伸させる。

跳ね上がりそうになる身体の重心を崩さないよう、少女の美臀を驚掴みにした。

十七歳の柔らかな尻肉が、ぶるんと柔らかく掌に心地良い。

「あんっ、んっ、はあんっ。激しっ——ああんっ」

轟然と突き込まれる肉棒によって、女子高生の媚声が乱れ散る。

洋一の腰が一往復するごとに、真奈美の背に流れる優麗な黒髪がさらさらと波を打つ。制服の白いブラウスとのコントラストが目眩しい。

「こんな格好で犯っていると、何か真奈美をレイプしてるみたいだ。ああ、すげえ興奮してきた。タマがゾクゾクしてくる」

女を背後から押さえ付けてしなやかな肢体を封じ、男が思うがままに権能を揮うセックス。美尻を掴み、絶対に男へ逆らえない状態にした上で、快樂の赴くままに腰を叩き付ける野蛮な交合が、洋一に宿っている獣性を頗る満足させる。

真奈美が全裸になっておらず、高校の制服を着崩して犯している情景が、余計に強姦を惹起させた。

「こ、のサディスト——ああんっ」

「今更何わかりきったこと言ってるんだ。俺がエスだつてのは、散々犯られてきたお

前が一番良く知ってるだろ」

洋一が好むセックスは混じり気無しの野獣系だ。女を責め立て、よがり狂わせ、快楽に服従させるセックスこそ、最も男らしく、牡らしい悦びを感じられる。

無論、本当の強姦や凌辱は男の風上に置けない、クズの所業だと唾棄している。

その一方で、疑似レイプとはいえ男の支配を受け入れさせ、その上で女が快感に喘ぐのは、牡としての自尊心を恍惚に浸らせた。

「もつとエロく鳴けよ。子宮から声を搾って、男を悦ばせる」

「ああっ、んっ。やっ、深い——んんっ」

長い積み重ねの果てに、洋一は真奈美の弱点を知り尽くし、同時に快楽の湧出点を開発してきた。膣の最奥に鈴肉をしゃぶらせ、腰を細かく揺すり上げると十七歳の美少女はこれまでとは明らかに音色の異なる艶声を響かせる。

その可憐で淫らな鳴き声が、牡の子胤袋を妖しく舐めた。

「あんっ。大体……強姦なんて、高尚なモノじゃないわ。下品で野蛮なエロ猿に犯されてるんだから、獣姦って言いなさいよ。このケダモノ」

女の尊厳を煽ってやると、優等生としてプライドの高い真奈美は、色に染まっていた瞳に鋭い光を宿す。その無為な抵抗が、嗜虐性を帯びた牡の獣性を擦ってくる。

「そのケダモノに犯されたがった挙げ句、サドちんぽでドロッドロにまんこを蕩かされているお前は、ケダモノ以下の下変態女だな」

「だ、誰が変態——んっ、ああっ」

子宮口に牡の穂先をねじ込み、少女の腹の中からぐりぐりと抉ってやる。

セックスに慣れてなかった頃は、最奥を力強く突くと真奈美は随分と痛がったものだ。しかし、媚肉の耽溺を味わえるようになってからは、淫熱で蕩けた頃合いを見計らってこうして突き犯してやると、女子高生は容易にあられもない嬌態を晒してしまふ。半強制の禁欲を課せられていたので、乱れ具合はいつもより数段過激だった。

(傍目には生真面目な女にしか見えないのに……このギャップ、最高だ)

凜々しいが、ちよつと堅いと思われがちの美少女が、こうして股座を挿抜させるごとにどろりと粘った淫声を紡ぎ出す。糸を引く蠱惑の嬌鳴が洋一の鼓膜にべったりとこびりつき、口内に獣の涎を滴らせる。

色に熔け、肉欲に溺れたあえかで艶めかしい素顔は、男に暴虐の悦びを湧き上げらせ、より怒張に邪な熱を滾らせる。

「ほら、ケダモノにレイプされてよがりまくる変態女子高生。そろそろ射精してやるから、しつかりマン褰搾れよ」

「ま、待って。まだ——あ、んんっ」

真奈美が何か言いかけたが、洋一は聞こえないふりをして一気に腰の動きを加速させる。

（もつとこいつのまんこを堪能したいが……クソッ。やっぱ、禁欲で溜まっているから無理か）

美しい幼馴染みを己の欲槍で串刺しにし、股座で思うままに支配する至福。

そんな濃密な色と肉の悦びにいつまでも酔いしれたかったが、短いとはいえ禁欲生活の反動は着実に牡の持続力を脆くさせていた。

射精衝動が迫り上がってくるのをつぶさに感じ、洋一は法悦の爆発へ向けた腰遣いへと即座に切り替える。

「あつ、ダメッ。洋一、お願いっ。私——あつ、ん、っ」

「何が駄目なんだよ。お前のまんこ、ゴム付けてんのに中出しねだりまくって、さつきからちんぽに抱きついてるじゃないか。ほら、さつきとイけ。イツちまえよっ」

洋一は鍛え上げた大腿筋を張り詰め、アキレス腱を浮き上がらせて射精へ向けた最後のラッシュをかける。

男子高校生に見合った逞しい胸筋を滾らせ、轟然と挿抜する牡槍を通じて女の甘肉

を喰い散らかしていく。

汚濁混じりの水音が激しい交合と共に結合部から掻き出され、そこにベッドのスプリングが軋むことで、室内に卑猥な不協和音が跳ね回った。

白く泡立った愛液の粒が媚唇から飛び散り、シートに淫らな点描が穿たれていく。

「おお、出るっ。イクぞ、真奈美っ。出るっ、ううっ——おおっ」

「ああんっ、洋一つ。んっ——はあんっ」

掌に強く尻肉を握り締め、ゴムで覆われた亀頭冠を子宮口に啞えさせる。獣の咆哮を追い風に、灼熱の濁液を勢いよく噴き上げさせた。

一瞬にして潰れていた精液溜まりに牡の逆りが充填される。一度だけではなく、二度三度と衰えを知らない放精によって、コンドームの先端がぶつくりと肥大した。

（うっ……危ねえ……）

絶頂の波が急速に引き、目眩に似た脱力が四肢を弛緩させる。方向感覚が一時的に喪失し、重心がぐらついた。

真奈美の臀肉から指を離し、華奢な下半身に尻餅をつかないようベッドに手を突くと、バスケで鍛えられた掌で自身の身体を支える。

（真奈美とするセックスは……最高だ）

絶頂に痙攣する肉棒を温かな蜜肉に抱擁させ、洋一は肺の底に籠もっていた空気を深呼吸で入れ替える。

中学生の頃から真奈美とこうして身体を重ねて来たが、頻繁に抱き、犯し貪っている、飽きが生じたことはただの一度もない。

(こいつの身体、すげえ女らしくなってきたな)

まだ破瓜をさせたばかりの頃は、膣の具合はそれほど優れたものとは言えなかった。洋一の腰遣いも稚拙だったし、真奈美の未発達な女穴は締め付けがキツイだけで、オナニーの方が心地良く感じたものだ。

そんな自慰も、今や月経でセックスができなくなる際の、代償行為に落ちぶれてしまっている。

細いだけだった身体は女としての柔らかさを帯び、繊細な肌からは微かに甘い香りが生み出され、単に抱きしめているだけでも心地良い。

(もつとも、真奈美をとやかく言える立場じゃないか)

セックスのスパイスにと、真奈美を言葉責めにして淫らに詰ったわけだが、洋一も十二分にこの幼馴染みの身体に溺れてしまっている。以前だったら、テスト期間中だろうと自慰に耽って込み上げてくる欲情を霧散させていたが、セックスでより愉しめ

るという動機で自慰を抑制できてしまっていた。

(…：俺、やっぱり真奈美が好きなんだな)

未だエクスタシーの潮流に浸っている美少女を見下ろし、洋一は胸中で深く重々しい溜息を吐く。

兄妹ほど密接ではなく、他人と呼ぶには近すぎる幼馴染みの少女。

その連綿たる繋がり故、逆に後腐れようがないセックスフレンドとして抱き合ってきた真奈美に、洋一は気付かぬ間に惚れ込んでしまっていた。

(こんな綺麗になって…：俺と違って、こいつには中学の面影なんて全然残っちゃいない)

仮に、高校で知り合った友人が中学の卒業アルバムを見ても、その凛々しい容姿で目立っているはずの真奈美を、すぐに見つけることは難しいだろう。

当時、真奈美のヘアスタイルはベリーショートだったし、体型だって同年代の女子と比べても随分のつべりとしていた。制服を除いてスカートは滅多に穿かず、パンツルックが大半だったので、遠目からでは男と勘違いされるのも珍しくなかった。

ところが卒業アルバムの集合写真を撮った日を境に髪を伸ばし始め、高校入学の頃にはショートになり、以後はロングヘアを維持し続けている。

曲線に乏しかった身体は急激に丸みを帯び、そのしなやかな肢体もあって見る間に女としての魅力を帯びていった。

(何より……この時の真奈美は、どんなアイドルより可愛くてエロい)

性悦に蕩けた幼馴染みの貌が、洋一の鼓動を熱く高鳴らせる。

恍惚の靄に曇った双眸。朱に染められた白い頬。だらしなく涎を垂らす濡れた桜唇。凜とした美少女だからこそ、肉悦に熔け崩れた痴態には、匂い立つ艶と儂いまでの麗姿が視界に焼き付く。

(思い切って告白したところで、玉砕されるのは火を見るより明らかなんだよな)

中性的な容姿ということもあり中学時代は浮いた話一つなかったが、高校に入ってから真奈美は二十人近く言い寄ってきた男を袖にしている。

あんまり振ってばかりだと馬鹿な女から顰蹙を買うから——という理由で、洋一が偽彼——つまり、偽物の恋人になって欲しいと頼まれたのは、今から数ヶ月前の話だ。

(片や優等生の美少女で、片や脳筋の体育会系……釣り合わねえよな。やっぱり)

風紀委員を任せられるだけあって、真奈美の成績は全科目に渡って遍く高い。斎美市立高校は進学校なのでさすがに学年トップは取れないが、それでも上位十名から脱落したことは一度だってありはしない。

一方の洋一はといえば、成績は下から数えた方が早く、調子が良くても平均よりやや上以上は望めず、補習を受けることも決して珍しく無い。身体能力は高いが、残念ながら進学校においては自慢できるステータスにはならないのが現状だ。

(仕方ないとはいえ、偽彼つてのは結構堪えるものがあるなあ)

一応、周囲にだけは公認の恋人として知られているだけに、こうまであからさまに恋人として眼中にないと明示されるのには、内心暗澹たるものがあつた。

(つと……名残惜しいが、そろそろ抜いておくか)

勃起のピークが過ぎ、気怠い緩慢が股座に伝ってくる。

欲を言えば、想いを寄せた少女をいつまでも貫いていたかったが、避妊をしなくてはならない都合上、我が俣は許されない。引き抜く際に万が一外れないよう、コンドームの根本を握ってゆっくりと蜜壺から引き抜いていく。

「ん……あ……」

真奈美の甘い吐息と共に、白く泡立てられた愛液がこぼりと牝穴から零れ、じつとりとシートに卑猥な染みを広げていった。

「はは、スゲー出たな。真奈美、見てみるよ。お前に搾り出されたザー汁で、ゴムがタプンタプンになってる」

パチンと音を立てて引き抜き、淫らな泡の付着したコンドームを掲げる。禁欲の反動もあってか、放たれた精液の量は普段と比べても格段に多い。

まだ法悦の余韻が抜けきっていないのか、真奈美は胡乱な瞳でぶら下げられた使用済みコンドームを見つめていた。

（まだ犯り足りないけれどゴムが無いからな……ああ、チクショウ。なんだって俺はこんな大事なことを忘れていたんだ）

射精をしたばかりではあるが、男子高校生の旺盛な性欲はこの程度では鎮火しない。禁欲によって過剰に生み出された子胤は、まだ陰囊にずっしりと詰まっている。

勃起の減衰は著しく遅いので、やろうと思えば即座に二回戦が可能だ。

（避妊だけは万全を尽くす約束だし……ま、仕方ない）

真奈美に襲いかかりたい衝動をグツと堪え、コンドームの口を結ぶ。ベッドの脇に押しつけられていたティッシュケースを手繰り寄せ、五、六枚引き抜く。ゴミ袋から透けてもよいよう鼻紙に偽装し、適当なフォームで投擲する。

バスケの経験が無意識に反映されたのか、コンドームは理想的な放物線を描いた後、屑籠の堆積を微増させた。

（おっと……忘れずに撮り収めておかなくちやな——と）

サイドチェストに乗せられていた型遅れのスマートフォンを手にし、撮影モードにして手早く美少女との事後を写真に収める。

簡易なハメ撮りだが、真奈美が淫らに乱れた姿を収めるのは、洋一の大きな楽しみの一つでもある。もつとも、絶対他人には見せないという条件を提示しても、真奈美から許可を得るのには随分と時間を有したが。

「さて——おわっ」

携帯を枕元に放り、涼しい下半身を隠そうと床に散らしていたハーフパンツを取ろうと屈みかけたところ、馴染みのある温かな感触が背中から覆い被さる。

白く嫋やかな腕が首から回され、胸板の上でしつとりと絡んだ。

「な、何だよ。まんこならすぐ拭いてやるから、ちよつと待ってる」

自分だけ着替えようとしたので、アフターケアを疎かにされたと早合点したのだから。肩に乗せられた形の良い頤にドキリとしながら、洋一は慌てて弁明した。

「……いいの？ それで」

まだ情交の余熱が色濃く残った、熱く湿った吐息が男の頬を撫でた。

甘い痺れが肌を走る最中「何のことだ」と、洋一は平静を装いながら、端折り過ぎた問いの子細を求める。

「コレよ。まだ、出したり無いんでしょ」

もうセックスは終わりだが、鈴肉は意地汚く口を開閉している。卑猥な口端に真奈美の繊指がびたりと乗せられた。

まだ尿道に滞留していたのだろう。ぷっくりと玉になった精の雫を、透明な爪が掬い上げた。

「私にあんな沢山ザーメン搾り取られたクセに……ほんと、男っついでいやらしいわね」

「久々だからな。溜まっていて当然だろ——うっ」

微睡みのかかった薄い微笑みを浮かべたまま、真奈美の小指が鈴口を語る。

尿道の先端が優しく、それでいて加虐を帯びて捻り込まれ、痛い痛みと心地良さがビクリと陰茎を戦かせた。

「それじゃ……もつと射精させてあげる」

ふわりと柔らかな重みが消える。真奈美は股座から愛液を滴らせたまま床に降り、ベッドに腰かけていた洋一の前で膝を突く。

顔にかかった黒髪を片手で耳朶へと流すと、少女はゆっくりと振り返った怒張を口に含んだ。

「こんなに興奮させて……舌が火傷しちゃいそう……チュ……んっ、あむっ……」

可憐な桜唇がでつぶりと肥大した亀頭を呑み込んだ。泡混じりの涎を絡ませた舌肉が裏筋をねっとり舐め上げる。不意打ちに等しい真奈美のフェラチオに、洋一はリネンを握り締めることで腰が跳ねるのを抑えた。

「っ……お、おい、真奈美。お前、フェラは嫌いなんじゃないのかよ」

もう数えるのも馬鹿らしいほどセックスに耽った仲だが、洋一が真奈美からフェラチオをされた経験は殆どない。それこそ、片手で数えられる。

理由は簡単で、真奈美が口淫奉仕に拒絶の意を示すからだ。

「ええ、嫌いよ。大っ嫌い。息が詰まるし、顎が疲れるし、口の中に変な匂いが残るもの。こんなこと、好きになれるわけじゃないじゃない」

ちゅぽんと間の抜けた音を立て、真奈美の口腔に収められていた肉棒が引き抜かれた。十七歳の桜唇に卑猥な水糸が綺羅とかけられる。

「特にコンドームを付けた後にするフェラなんて最悪ね。ザーメン臭とゴムの匂いが混ざって、気持ち悪さも倍増って感じ。チュ、んぶ……」

自分から口淫奉仕を強行しつつ、真奈美はまったく正反対の悪態をすらすらと紡いでいく。あまりの言動不一致に、洋一は何を言うべきか逡巡した。

「でも……ゴム買い忘れたミスはとにかく、洋一は私の我が侷を聞いて、一回だけし

かセックスできなくても、きちんと抱いてくれたでしょ」

涎に濡れ、再び凶暴な張りを取り戻してきた鈴肉を、真奈美が包み込むように掌で愛撫した。少女の白い肌に、濁った穢泡がべったりと付着する。

「このフェラは、その埋め合わせ。洋一だって出し足りなかったでしょうし、私にフェラされるの、満更でもないんですよ」

「そりゃ、フェラ嫌いな男なんていないだろうが……うっ」

淫らな性に従順でありながら、変なところで義理堅い幼馴染みに当惑していると、少女が一際ねっとり裏筋をしゃぶった。舌肉の這い上がってくる感覚が肉棒へと染み込み、精囊が喜悦に震える。

「それなら、素直に好意は受けておきなさいよ……ん、はむ……」

桜色の唇が鈴口を隠した。温かな粘膜の感触が、龟头冠を愉悦に痺れさせる。ちゅうちゅうと淫らながらも可愛らしい音を立てた後、雁首までずっぼりと呑み込まれた。片思いの少女が男の股座に顔を埋め、卑猥な肉柱に奉仕する淫佚いんいつな画が、洋一のエス氣質をちりちりと炙り立てる。

「いっ……おい、真奈美。フェラしてくれるのは良いけど、歯は立てるなって。地味に痛いんだぜ」

もともと、フェラチオの実績がまるで無い少女は、すぐに稚拙な技巧を露出させてしまう。

「そんなこと言っても……んう……仕方ないじゃない」

涎の端を牡肉の穂先と掛け合わせた真奈美が、不満げに洋一を見上げた。

「頻繁にセックスしているから何となくしか感じなかったけれど、洋一のちんぽ凄く成長してる。啜えるのが精一杯なんだから」

「えっ、そうか？」

毎日見ている逸物なだけに、真奈美に言われてもどうにも洋一はピンとこない。

身長が伸びているのは定期的に学校で行われる身体検査でわかっているが、ペニスの大きさなど一々計測してはいないからだ。

「大体、このちんぽ大きすぎるのよ。初めての時、あんまりにも痛かったから、みんなこんな経験してるのかって調べて見たら、私みたいなケースは稀だったわ」

そういえば、と洋一は思い出す。洋一が真奈美の処女を散らした時は、この肢体が暴れ回って大変な事態になったものだ。

破瓜の鮮血も強烈だったが、事が終わった後、痛みを堪えようと真奈美が引っ掻いたシートに綻びが生じていたのを見て、冷や汗をかいたものである。

「あんなデカチンをバージンの彼女に挿し込んだら、その瞬間にビンタされて破局ね。洋一、童貞喪失の相手が私で感謝しなさい」

「お前……そのちんぽにハメられて毎回喘ぎまくっているクセに、よくそこまでポロクソに悪態吐けるもんだな。う、おっ」

口の中にすっぱり包み込まれた鈴口を、真奈美が舌先で穿ってくる。性器の孔を弄られる倒錯の刺激に、洋一の股間がざわざわと悦美に波立ち、肛門がきつく窄まった。（まんこと比べれば全然弱い心地良さなのに……真奈美にフェラされてるっただけで、滅茶苦茶に興奮する）

ほのかな思いを寄せている美少女に、己の卑棒を啜えてもらう優越感。

真奈美本人の意志はとにかく、傅き、拙い痴戯で男の欲火を沈めようとする姿に、洋一が牡として備えている支配欲がぞわぞわと煽られる。

「ん……凄く熱さ……もう、パンパンにちんぽ膨らんで……いやらしいわね、どれだけ欲情してるのよ」

「女に奉仕させるのは男のロマンなんだよ。特に、普段は気の強いヤツが、こうして服従するみたいにフェラしてくれるっつのは、ギャップもあって良い感じに萌える」

「このサディスト——あつ、む……んんっ」

ちよつと力を加えて肉棒を迫り上げてやり、亀頭冠を真奈美の口蓋に押しつけてやる。相対的に頤が引き上げられた美少女が、喉からくぐもつた吐息を漏らさせた。

「おお、いいシチュだ。なんだかこれはクセに——うっ、あつ」

男の欲望を成就していた洋一だが、抗議を示すために這わされた真奈美の舌が、裏筋を淫らにいたぶってくる。痒みとくすぐったさが混ぜ合わされた快楽は股座を痙攣させ、洋一は間抜けな悲鳴を上げた。

「んっ……ぶ、は……フェラの経験なんか殆どない女に、いいようにちんぽを踊らされるなんて……ふふ、大した服従もあつたものね」

「おおつ、ま、待て真奈美。そこはもうちよつとゆつくり舐めて——ん、ぐっ」
優等生たる少女は男性器を深く口に含まなくても、しかるべき箇所適切な刺激を与えれば良いと学んでしまったらしい。棹腹は啜えず、亀頭のみをすっぱりと口に含むと、舌先を駆使して裏筋を執拗なまでに舐め回してくる。

舌乳頭が無数の刺激を生み出し、快楽の泡を精柱に沸き立たせた。情けない喘ぎ声を漏らすまいと、洋一は括約筋を力強く引き締める。

「んっ……なんか、トロツてしたのが出てきた……ザーメンみたいな変な匂いがしないから……これ、我慢汁ね」

「うくっ、こ、こら。ちんぼの中をあんまり弄るな。うおっ」

薄くぬめりを帯びた舌先が射精孔を穿るたびに、下腹の内側から奇妙な快感が渦を巻き、脳裏に倒錯の快感が惹起する。

普段は孔に挿し込む側の洋一だが、孔に挿し込まれた経験はない。女を支配しているつもりが、逆に女から性器を弄ばれ、捕食者たる牡の尊厳を揺らがせる。

背徳の悦楽に洋一の股座はガクガクと震え、握り込まれた足指がカーペットに爪を立てた。

「気持ち良さそうな顔晒して、何馬鹿なこと言っているのよ。ちんぼだって、射精したいってふるふる震えてるじゃない……あむ……あむ……チュッ」

舌が引かれ、一瞬だけ甘く危険な波濤が鎮まる。しかし、一拍も経たぬうちに桜唇が強く窄められ、膨張していた亀頭が快美に圧迫された。

だらしなく開いていた鈴口がキュッと締めまり、先走り少女の口内へと跳ねる。

「ふふっ……凄量の我慢汁……洋一のこんな良い貌が見れるのなら、フェラもそこまで悪く無いわね」

「う、くっ、こんの野郎……調子に乗りやがっ——うあっ」

「馬鹿ね、私は女よ。ほら、さっさと射精しちやいなさい」

当初は義理として行っていた口淫奉仕だが、女が男をよがらせる愉しみを十七歳の女子高生は見出したらしい。少女はより激しく、より執拗に粘液塗れの舌を這わせ、男性器のもっとも敏感な部位を騷る。

美しい黒髪が不規則な波を打ち、白い頬が卑猥に輪郭を変貌させた。鼻梁から流れた呼気が涎に濡れた肉茎を這い、ぞくりと心地良い刺激が走る。

清廉な桜唇からはおよそ似付かわしくない淫らな水音が漏れ、じゅぷじゅぷと卑猥で穢らわしい水音を撒き散らした。

「ああ、畜生……どうせなら、一気に出してやる。お前の口を精液で溢れさせてやるからなっ」

射精衝動の抑制は歯止めがかからず、精囊が決壊するのはもう時間の問題だった。半端に我慢して気概のない射精をするくらいなら、欲望に付き従うままに噴精し、ぶちまけたいと欲するのが牡の本能だ。

フェラの快感を和らげるため弛緩させていた四肢を、今度は反対に精を思い切り撃ち出すため喫緊させていく。

ベッドに手を突いたまま背を丸めると安定感が揺らいだため、洋一は咄嗟に真奈美の頭を両手でがっしりと掴んだ。

「っ……ふふ、一発目であれだけ出したのに、意地張っちゃって。いいわ、受け止めてあげる。私の口、洋一のザーメンで犯しなさい」

洋一の蛮行に真奈美が僅かに眉を顰めるものの、それが射精寸前に生じるなげなしの抵抗によるものだと見抜いたらしい。十七歳の女子高生はくすりと挑発を宿した微笑みを浮かべると、射精を促す熱烈な舌戯で亀頭をしゃぶりまくる。

欲望を決壊を促そうと、白い指が剥き出しになっている精囊をすっぽりと包み込んだ。さわさわと愛撫したかと思えば、痛みに転ずる寸前でどっしりとした膨らみを揉みしだく。

「おおっ、真奈美っ。出るっ。口に出すぞっ——う、おおっ」

輸精管が膨らみ、辜丸から獣汁が決壊する。洋一は耳鳴りがするほど強く奥歯を噛んだ。体積を増した亀頭が張り詰め、灼熱の快感が尿道を灼く。

「あっ、んぐっ……ふ、う——んっ」

亀頭冠を真奈美の口蓋に押しつけ、鈴口から撃ち出された濃精を浴びせる。

一度目の射精に勝るとも劣らない、強烈な噴精。

牡の欲情が爆発し、獣の咆哮が洋一の咽喉を掻き巻く。

口内射精の経験が殆どない少女は、驚嘆と動揺に目を瞬かせ低く喉を鳴らした。

「は、あ……良かったぞ。真奈美」

絶頂で力んでいた四肢が解れ、浮かんでいた腰は糸が切れたようにベッドに沈み込む。少女の頭を掴んでいた手を緩めると、洋一は脱力した背を正した。

「ん……ふ……」

精をすべて出し尽くして暫く経つと、真奈美がゆっくりと口を離していく。

雁首に溜まっていた汚泡が、口内粘膜によつて掻き出された。亀頭冠が少女の唾液に塗られ、てかてかと猥雑な光沢を放つ。

鈴口を塞いでいた一際濃い精液の塊がちゅると吸い出され、美少女の口内へと吸い込まれていった。

（こいつ……何てエロい顔してるんだよ）

自分の口淫だけで男を射精させることに、至極満足したのか。義理として果たしたフェラチオであるにもかかわらず、真奈美は媚悦を湛えた微笑みを浮かべた。

白い肌は興奮に色付き、精液を溜め込んだ頬はぶっくりと膨らんでいる。

濡れた桜唇から唾液混じりの精液がゆっくりと糸を引き、制服のスカートに落ちて淫らな汚色を穿った。

（真奈美の口……俺の精液が溜まっている）

この美少女の口内を己の精汁が犯している——その事実には、どす黒い牡の独占欲が込み上げてくる。

(口……開かせてみたい)

大量に噴精した実感もさることながら、その頬の膨らみ具合から鑑みても真奈美が相当量の子胤汁を口に含んでいるのは明白だった。

口内射精をした張本人だからこそ、この幼馴染みがどれだけ多量の精を受け止めたかは一番良くわかっている。わかっているとお、獣欲によって穢された光景を目に焼き付けたくて堪らない。

「ん……」

精液を閉じ込めた口を開かせる口実を模索する洋一に、真奈美が自分から大きく口を開いた。

洋一が卑俗な欲望に煩悶していたわけだが、真奈美は真奈美でこの搾精を自慢したかったらしい。

躊躇う素振りをまったく見せず、頤を反らせて洋一に口内を覗き込ませる。

「スゲー出てる……お前の口、精液に浸かっているぞ」

奇妙な、それでいて淫靡な欲望が合致した悦びを感じながら、洋一は幼馴染みの淫

戯を賞賛する。

輝く皓歯は粘った汚濁でべったりと汚れ、健康的なピンク色の歯肉には斑のヴェールがかけられている。

薄い舌は涎の泡に混じり、子胤汁によって冠水していた。

(真奈美の口を……俺が犯したんだ)

洋一は真奈美と何度もセックスをしている。

しかし、毎回例外を許さず避妊を心がけていたため、これまで膣内射精をした経験は一度もない。

だからこそ、なのだろう。膣ではないにしろ、女の穴を初めて自分の精液をぶちまけたという事実を目の当たりにして、洋一は黒い悦びが沸き立つのを抑えられない。

むず痒い衝動が四肢から生じ、それはやがて股間に溜まって黒く濃み、洋一の本能に囁きかける。

「……なあ、真奈美。そのまま、飲んでみろよ」

牡の色欲が、洋一の舌を操る。セックスフレンドの射精に傾注はしていても、その先までは考えていなかったのか。洋一の言っていることがすぐに理解できなかったらしく、口を開けたまま真奈美の表情が固まった。

「デキるわけじゃないし、精液を飲む経験をしておくつてのも良いんじゃないか」
わざわざ嘔下しなくても、舌から伝う味だけわかれば呑み込む必要は無い。だからこそ、真奈美の好奇心を刺激する言い回しを用い、婉曲的に精飲を促した。

「お前も俺に愛液を飲ませたわけだし、やってみるよ」

駄目押しに、牡の願望を過去に真奈美がさせた行状に重ね合わせる。

まだ中学生の頃、真奈美は渋る洋一に自分の愛液を嘔下させ、その感想を求めてきたものだ。

風紀委員という役職を自ら買って出る、奇矯な少女だ。この義理堅い性格なら、こうして借りを返せと言えば安易に拒否できないだろう。

(――よしつ)

誰が見てもわかる当惑と逡巡の末、真奈美は不承不承といったように小さく頷く。

唇を結んだ美少女は、嫌いな食べ物を嫌々飲み込む子供宛らに、眉根を曲げて瞳をギョツと閉じる。

オーバーニーハイソックスに包まれた膝を立て、きちんと見るとばかりに洋一へ向けて白い喉を大きくさらけ出した。

「ん……っ……」

ゴクン——蠕動によって、美少女のあえかな喉が大きく波を打つ。

口内に大量に放った精は一度では到底飲みきれず、二度、三度に分けて真奈美は喉を鳴らす。その度に白い喉がなめらかにうねり、背徳の官能を洋一に見せつける。

(俺の精液を、真奈美が飲んでる)

牡の欲望が煮詰められた汚濁を、少女がゆっくり飲み干していく。

濃密な粘りが喉を這い、ゆっくりと糸を引きながら落ちていっているのだろう。真奈美は何度も唾を飲み込み、喉の粘膜に染みつこうとする精液を洗い流していた。

その健気な行為が、射精の興奮が渦巻く股座に新たな疼きを生み出す。

「どうだ。俺の精液を飲んだ感想は」

「バカ……ん、く……最悪に決まってるでしょ」

まだ精液が喉に詰まっていたらしく、一度だけ涎を飲んでから少女は目を座らせた。「生臭いし、苦いし……変に生温かいから、気持ち悪いったらないわ」

肯定要素を微塵も含まない悪態がちらちらと吐露される。これだけ文句があるなら貸し借りなんて知ったことかと吐き出せば良いのだろうが、それをしないのが真奈美という少女だ。

「それにすっごいネバネバしてるから、喉がずっとベト付く感じ。うう、なんかお腹

まで気持ち悪くなってきた」

膝立ちしてた腰をべたんと床に落とすと、真奈美はブラウス越しに腹部を慰撫する。自分の子胤がジワジワと少女の身体を浸蝕する様を想像し、洋一は暗い愉悦に身震いする。

背理の快感を敏感に嗅ぎ取り、噴精を為し終えて垂下していた肉棒がピンツと雄々しく跳ねた。インターバルを含まず三度目の射精を求めて勃起する肉棒に、真奈美は軽蔑を通り越して呆れた視線を突き刺してくる。

「洋一……いくら禁欲していたからって、ちよつと盛り過ぎじゃないの」

「健全な男子なんだから当然だろ。何度もセックスできるんだから、雄として優秀だって証拠じゃないか」

もつとも、その性欲の源泉には好意を寄せている少女を汚辱した悦びが多分に含まれているのだが、当の本人は無論気付いていない。

「俺をとやかく言ってるが、どうせお前だってまだイキ足りないんだろ。ほら、上乘れよ。シックスサインしてやる」

「シックスサインしたい——の間違えでしょ。このドスケベ」

訂正を求める真奈美だが、やはり一回絶頂に達しただけでは物足りなかったらしい。

ブツブツ言いながらも躊躇なく立ち上がり、黒いオーバーニーハイソックスを伸縮させ、ベッドへしなやかな美脚を載せた。

「ん……待て。ちよつと待ってくれ」

苦笑しながらも仰向けになろうとする洋一だったが、携帯のバイブレーションが無粋に枕元で揺れ動く。スリープを解除すると、情事場において電源を切っていないかった洋一に、真奈美が露骨に非難の三白眼を作り上げる。

「何で出るのよ。一度切って、後でかけ直せばいいでしょ」

「俺もそうしようと思ったんだが……おばさんからだ」

表示されていた発信者名は真奈美にとっても埒外だったのだろう。「えつ、ママ？」と声のトーンを上げ、携帯を挟んで洋一の側頭に耳を寄せる。

情事の後という事もあり、蠱惑を孕んだ甘い香りが洋一の鼻を擦った。これから電話に出る相手が相手なだけに、洋一は陶然となる意識を苦渋の決断で振り払う。

（それにしても……なんだっておばさんが俺に電話してくるんだ）

真奈美の母と会うこと話すこと自体は珍しくも何ともないが、洋一個人に宛てて電話がかかってくるのは極めて珍しい。

友人や両親相手ならとにかく、顔見知りとはいえ目上の女性からの連絡を切るわけ

にはいかなかった。

『もしもし、洋一君かしら』

「ええ、と……うん。こんにちは、おばさん」

裸のまま着信を受けると、馴染み深い真奈美の母——武藤響子の落ち着いた美声が、洋一の耳孔にこだました。

『もうそろそろこんばんは——よ。ふふ、洋一君の携帯にかけるなんて、滅多にないもの。驚かせちゃったわね』

両親ほどではないにしろ、幼少期から成長を見守られてきたためだろう。電話口の僅かなやりとりで、響子は洋一の動揺を敏感に読み取ったらしい。

こういう所は生涯敵わないだろうな、と洋一は舌を巻いた。

「それは別にいいけど、何かあったの」

真奈美との付き合いがあるだけに、洋一は響子とも頻繁に対面している。

洋一は高校生、響子は社会人という立場にあるわけだが、武藤家には頻繁に通っているため、一週間以上会わなかったことなど皆無と言っても過言では無い。

顔を見ようと思えば何時でも見れる間柄だからこそ、わざわざ洋一個人に電話して来たのには、何か差し迫った事情があるのだろう。

洋一の声も自然と強張った。

『そんな大したことじゃないのだけれど……うちの子——ええと、真奈美は洋一君と一緒にいるかしら』

「え、つと……うん、いる」

ただし、ベッドの上で着衣を乱して——だ。

洋一は何一つ嘘は吐いていないが、響子の娘と淫らな痴戯に耽っていただけに、是非かを答えるだけでも妙に言葉を選んでしまう。

『ハア……試しに洋一君の携帯にかけてみて正解だったわ。あの子ったら、何度かけても気付いてくれないんだもの』

「ああ、なるほどね。おばさんが俺に電話してきた理由がわかった」

真奈美と洋一が高い頻度で一緒にいるのを、響子は経験則として知り得ている。

娘に電話が繋がらなければ、近くにいるであろう洋一の携帯を鳴らせば、芋蔓式に真奈美を見つけられると考えたらしい。

『私の仕事も繁雑期が落付いたから、息抜きも兼ねて今日は外へ食べに行く予定だったのよ。それなのに、あの子ったらまだ家に帰った気配すらないんだもの』

制服姿なのもさることながら、部屋の片隅に立てかけられた真奈美の通学鞆を見れ

ば、学校から一直線に滝川家へと来たのは疑いようがない。

携帯の反対側から耳を敏てていた少女をじろりと睨め付けると、真奈美はぼつが悪そうに目を泳がせた。

「お前……試験が終わったらヤリまくることしか考えてなかっただろ」

「……失礼ね。ちゃんと試験のことも考えていたわよ」

携帯のマイクに手を被せて洋一がひっそり非難すると、真奈美は矛先をずらして解をぼやけさせた。

考查期間におけるセックスの自重と、生理が周期が重なったことで、外食のことなど完全に頭の片隅に追いやられていたのは明白だった。

真奈美の性欲の強さを熟知している洋一だけに、この女子高生の脳裏にはピンクの靄がかかっていたと容易に想像できる。

「ええと、おばさん。真奈美に代わるよ」

『ううん、必要無いわ。あの子の居場所はわかったし、なるべく早く戻るように伝えて——いえ、そうね。洋一君、真奈美を連れて一緒にうちへ来なさい』

「は？ え、いや……でも」

響子からの思わぬ招聘ならぬ招集命令に、洋一は一瞬言葉を詰まらせる。

『亮太さんと良子さん、今日も帰りが遅いでしょう。洋一君、また独りで食事するんじゃないかしら』

「そりゃ……まあ、そうだけど」

去年脱サラした洋一の父は、新しく立ち上げた自分の会社を軌道に乗せようと日夜奮闘している。幸いその注力は着実に成果に結びついているらしいが、反面我が家にいる時間は著しく少なくなり、帰宅も遅くなっている。

母は母で洋一の手がからなくなっただけでもあり、元は経理畑で働いたため殆ど付きつきりで父を支えている。

そんな激変した家庭環境により、最近では夕食が独りの時がとて多くなっていた。『私から二人に連絡しておくから、遠慮なんてしなくていいの。大体、昔はウチの子達がお世話になったんですもの。次は私が洋一君のお世話をするのは、理にかなっていると思わないかしら』

響子は今でこそたった一人で武藤家を支えているが、昔は家族を養うために仕事に忙殺されていた。まだ洋一の父親が一会社員であり、母親が専業主婦だった頃は、仕事で満身に夕食が作れない響子を慮り、武藤姉妹は滝川家の相伴に与っていたものだ。そういった恩があるからこそ、武藤家の団欒に招いてくれるのだろう。真奈美の義

理堅さは、確実に響子の影響を色濃く受けている。

『それに……真奈美は自業自得として、洋一君にはお詫びもしないといけないもの』
「お詫び——つて……何のこと？」

響子から何か謝られるいわれが思い至らないだけに、洋一はお詫びという言葉の定義を脳裏で再認する。そもそも「真奈美は自業自得」という意味もさることながら、この文脈から何故に詫びという言葉が紡がれたのか理解できない。

洋一の困惑をおもしろがるように、響子が小さくクスリと笑い『だって』と続けた。
『私の電話に出るまで、真奈美とセックスしていたんでしょ？』

ボテッ——と、掌からすり抜けた携帯がベッドに落ちた。慌てて拾おうとするが、焦っていたため指が滑り、更に携帯は床へと転がった。

「何やってるのよ、バカッ」と、実の母親に情事の最中を看破され、ある意味洋一以上に慌てふためいている真奈美が、小さく、それでいて苛烈に叱責してきた。

「あ、あの……いや、ど……どう——」

『二人ともテストで忙しいし、何より洋一君は年頃の男の子ですもの。真奈美と一緒にいたからひよつとしたら——と思っただけけど……当たり前だったみたいね』

ようやくカマをかけられたと知り、掌で踊らされた洋一は言葉を失う。

羞恥が顔面を真っ赤に灼いていく最中、いともたやすく誘導尋問に引っかかった洋一の脇を、真奈美が肘で小突いてきた。そこからは「間抜け」だの「ドジ」だのといった無数の罵倒が如実に込められている。

『そんなに慌てなくてもいいじゃない。洋一君が真奈美とそういう仲になってるのは、ちゃんと知っているもの。そうでしょ？』

「それは、まあ……わかってはいるけど」

真奈美に打たれた脇腹を摩り、洋一はゆっくりと動揺を鎮めていく。

洋一と真奈美は中学生の頃に肌を重ね合わせたが、その関係はすぐに響子に露呈した。ただし、響子は性欲に溺れたこの関係を決して禁止しようとはせず、洋一の両親に対して一切口を噤んでくれた。

健全な性欲は人生に彩りを与えてくれるのだから、学生として支障が出ない程度にセックスを愉しみなさい——と、寧ろ二人の爛れた関係を肯定すらしてくれている。

響子は今年で三十八歳だ。若くして二人の娘を生み、愛育してきた経験があるからこそおかしな道徳観を振りかざさない。

そんな響子の深甚な理解力に、かつて洋一は真奈美と並んで敬服したものだ。

もつとも、理解してくれているのは知っているが、セックスに耽っていたと見透か

されて平気な顔をしていられるのは、また別問題だった。

『それとも、私と交わした約束……まさか、反故にしているかしら』

「そ、それは守ってるって。これまで、一度だっておばさんとの約束は破ってない」娘とのセックスを許してくれた響子だが、それは決して無秩序な自由を与えてくれたわけではない。公序良俗を弁えなさいとしつかりと釘を刺されたし、中でも必ず守るべきとされたのが避妊だった。

どれだけ安全日であっても膣内射精の妥協は許さず、避妊具を装着しなければ絶対にセックスをしてはならないと、厳に念を押された。

万一にも破った場合は、今後如何なる理由があろうとも成人するまで娘とのセックスは許さないと通告されている。

「おばさんの信頼を失う真似……俺、絶対にしてないから」

普通の親なら、高校生同士のセックスフレンドなど認めないだろう。

破格の寛容で見守ってくれる響子に恩を仇で返すことなど、男としてするわけにはいかない。

何より、もし望まぬ妊娠をしたら心身共に傷つくのは他ならぬ真奈美だ。

だからこそ、洋一はどれだけ劣情に駆られ、どんなに膣内射精の欲望に焦がされて

も決して避妊を怠らない。

『ふふ、少し意地悪しちゃったわね。大丈夫、洋一君のとなりは昔から知っているもの。疑ってなんていないわ』

洋一の声があまりにも緊迫していたためだろう。響子は柔らかな声で太鼓判を押すと、クスリと微かに茶目つ気を帯びた笑いを零す。

『それじゃ、なるべく早く真奈美を——ああ、ごめんなさい。ちよっと待っていてくれるかしら……お帰りなさい、桃——そう、洋一君と電話——あ、こらっ——』

『やっほーっ。洋くんっ』

洋一がほっと一息吐いたのも束の間、響子の声が遠くなると、何やら激しい物音が生じ、次いで底抜けに明るい声が大音量で洋一の鼓膜を貫いた。

「うわっ。な、なんだ桃姉かよ。脅かすな」

『うん、そうだよー。桃お姉ちゃんだよー』

電話口であることを忘れていた音量に洋一が文句を付けるものの、真奈美の姉である武藤家の長女——武藤桃香は、まったく行状を顧みる気配がない。

「なあ、桃姉。俺、おばさんと話しているから——」

『ねえねえ洋くん。チャンプ買ってる？ 買ってるよね。後でウチに持って来て』

携帯から耳を離れた洋一は、改めて桃香に苦言を呈そうとするものの、その試みは最初の一手から粉碎された。

話を聞くどころか会話をぶった斬りにされた挙げ句、何の脈絡も無い一方的な要求が始まり、洋一は口を開けたまま声を途絶させた。

『今日、立ち読みし忘れちゃったんだよ。ハンタが連載再開したんだよねえ。洋くん、面白かった？』

「は？ ああ——」

『あーっ、待って待って。やっぱ楽しみが薄くなっちゃうから今の無し。ネタバレ無し。それじゃあ待ってるから早くしてね』

ブツン——と、応答をする間も無く、一方的に通話が打ち切られた。

洋一が啞然とし、真奈美が頭痛がするばかりに天を仰ぐ最中、再び携帯がバイブレーションする。

『ふう……まったく桃香は……本当に、ごめんなさいね。洋一君』

「はは……いや、ま……いつものことって言えばいつものことだから」

重い溜息を吐いた響子を、洋一は乾いた笑いで慰める。

桃香が洋一を振り回すのは今に始まったことではない。幼少期から何かと無茶に付

き合わされているし、妹である真奈美も一緒に道連れとなっている。

ただ、幾ら付き合いが長くても、あの天衣無縫ぶりに慣れることはない。セックス好きだが、根が真面目な真奈美に至っては言わずもがなだった。

『それじゃ、待っているわね』と短く纏め、響子との通話が終わった。

「……行くか」

「そうね……帰りましょ」

互いにまだ性欲は発散し足りていなかったが、この状況はもう男女が絡み合う空気ではない。いくら肉欲を優先するセックスフレンドの関係にあっても、最低限の雰囲気は欲しい。

それは女である真奈美には特に重要であろうし、秘かな恋愛感情を抱いている洋一も同じだった。

「明日、ゴム買うついでに服見てきたりするから色々回るけれど、何かいるものあるのなら教えてくれ。ついでに買ってくる」

衣装箆箆からストラックスを取り出しながら、何処に連れて行かれても響子の面子を潰さないモノを選ぶ洋一に「何言っているのよ」とぶっきらぼうな応答が跳ね返る。

「またコンドームを買い忘れたら堪らないもの。私も一緒にっていくわ。秋物も買

わなくちやいけないから、ちようど良いし」

「ったく……おばさんと違って、なんでお前はそう俺に信頼を置いてくれないんだかな。つーか、ちようど良くねえよ。お前、試着の回数と時間が長過ぎ」

「女の服選びなんてこんなものよ。彼女が出来た時に備えて、強い免疫作っておきなさい」

洋一は一切眼中に無いと言わんばかりの忠告が、男の胸中に疼痛を響かせる。

そんな心境を知らない武藤家の次女は、情事で乱されたヘアスタイルを整え、男の自室に据え付けた安物の姿見で後ろ姿をチェックすると「うん」と小さく頷く。

「ほら、早く帰りましょ。エッチしたから、私お腹空いちやった」

嫌味の無い無地のシャツを着込んだ洋一の腕に、するりと真奈美の纖手が絡んだ。

第二章 美熟オフィスレディと淫靡な密約

残暑も翳りを見せ始め、木の葉が微かに色付き始めた秋の夜――。

この界限で名の知れたシティホテルの一室へと足を踏み入れた洋一は、主の都合によつて突然住処をすげ替えられた飼い猫の如く、落ち尽きなく周囲を睥睨していた。

現役の男子高校生であり、十七年という歳月を過ごしてきただけに、洋一がホテルを利用するのは初めてではない。年に一回は父親が海外に連れて行ってくれるし、同年代の友人だけで泊まりがけの国内旅行に出かけたこともある。

見慣れぬ寢所に入る時は昂揚こそあれ、周章とは本来無縁だった。

(ああ、クソ……落ち着け)

しかし、今の洋一はかつて例がないほどに激しく動揺していた。焦点は拡散と収束

を繰り返し、鼓膜には自分の心音が反響している。

外は涼感すらあるのに、掌にはじんわりと汗が浮かび始めた。

「ほら、そんな所で立ってないで、早くこつちにいらつしやい」

柔らかに熟れた女の呼び声が、緊張に蝕まれていた洋一の視線を正面に引き戻す。網膜に結ばれた女を見つめ、洋一はごくりと生唾を呑んだ。

(すっげえ綺麗な人……なんだよな)

妙齡の美女——という言葉がこれほど似合う女も稀だろうと洋一は思う。

最初に印象として焼き付けられるのは切れ長の双眸だ。少女の名残を一切感じさせない大人びた目尻に、理知の輝きを宿した瞳は否応にも女が才媛であることを周囲に知らしめる。

日本人離れした高い鼻梁に、細く長い柳眉。茱萸ぐみの実を彷彿とさせる紅く熟れた唇とは対象的に、結び上げられた髪は黒い艶を放っていた。

三十八歳のわりにメイクはとても薄い、それは自身的美貌を誰よりも自覚し、美から媚に転じるのを防ぐための措置でもある。

ヒールを履かなくとも170センチに迫る長身は、女の柔らかな脂を除いて余分なものは何一つない。服の上からでも容易に豊かさを示した乳房から急激に腰は括れ、

こればかりは隠しようのない蠱惑の媚臀を描いた稜線へと繋がる。

それら匂い立つ色気は、ダークグレーの堅い色合いで統一されたスーツで大きく抑制されている。ただ、タイトスカートから伸びる、ナチュラルベージュのストッキングに彩られた美脚だけは、無防備に洋一の視線に晒されていた。

「ふふ、緊張しすぎよ。痛い思いをするわけじゃないんだから、もう少しリラククスしなさい」

当惑をまるで隠せていない洋一に、女は苦笑混じりに柔らかな微笑みを浮かべた。

形の良い紅唇が優しげに綻び、切れ長の双眸が丸みを帯びた。

「それは……そう、なんだけれど……」

女が言う通り、洋一には別段身構える必要は無い。そもそも、目の前にいる美熟女相手に緊張する理由など、本来ならば何一つ無いのだ。

そんなことは、洋一自身がきちんと自覚している。洋一を見つめる女も、そんな戸惑いを察した上で、年下の男があたふたしている様を見ておもしろがっていた。

ただし、いくら女が意地悪な態度をとったとしても、今の洋一には何一つ抗弁は許されない。

「最初はどうかな、と思ったけれど……ふふ、これなら私に対する贖罪としては十分

な効果になりそうね」

円熟した双臀がゆったりと備え付けのストールに乗せられた。

女は贖罪と言ったが、その当事者には検事や判事然とした態度は微塵も見られない。むしろ、黒い双眸には無抵抗な小動物を爪先で転がす、絶対者としての愉悅が輝いていた。

「それじゃ、そこに座って」

ストールの正面にあるダブルベッドに、ネイルケアが施された美しい指が伸ばされ、唯々諾々と洋一は寝台に腰掛けた。

「さあ、洋一君。私の秘密を知った代償として、あなたのオナニーを見せて」

そう言って、年上の美女であり幼馴染みの母でもある武藤響子は、洋一の知る美しい笑顔を見せたまま、淫猥な贖罪を求めた。

斎美市の最西端にある市立臨海公園は、街の喧噪から隔絶された静謐に充たされていた。水平線を一望できるこの公園は、良好なマイカーアクセスと最寄りに地下鉄が走っていることもあり、休日の昼間は家族連れで賑わう。

夜ともなれば沿岸は煌びやかなライトアップが施されるため、デートスポットとしての人気も頗る高い。

もっとも、平日の黄昏時ではどちらの需要も満たされず、何処を見渡しても人影はまばらで閑散としている。休日には誘導員が立たなければ收拾が付かなくなる大駐車場は、利用料がかかることもあつて車の数は更に少ない。

そのため、広大な面積であるにもかかわらず、洋一が目当てとなる車を探し当てるのに要した時間は、殆どゼロに等しかった。

駐車場の照明はまだ灯されておらず、目に映る車体は輪郭がぼんやりとしていたが、グラフィートカラーのアスファルトに、真紅のセダンは殊更によく目立つ。

何より、武藤家の見慣れた乗用車を洋一が見間違えるはずもなかった。

助手席側に立った洋一が車内を覗き込むより早く、中からドアロックが解錠された。深呼吸を一つして覚悟を決めた後、ドアを開いてゆっくりと助手席に身を沈める。

そのまま体を捻った洋一は運転席に座っていた響子へと向き直り、誠心誠意を込めて深々と頭を下げた。

「おばさん、ごめんなさい」

発端は、洋一が独りで武藤家の留守番をしていた頃まで遡る。

用事で外に出る真奈美から「私宛の荷物が来るから、代わりに受け取って」と頼まれた洋一は、預けられた印鑑を片手に幼馴染みを見送った。

予定通り、宅配業者から大手通販会社の名が刻印されたダンボールを受け取ると、洋一は早速真奈美の部屋で封を解く。この荷物には、手数料の削減を図って洋一も便乗注文していたため、予め開封の許可を真奈美から貰っていた。

その気の緩みは、ものの数分と経たずに洋一に因果応報となって降り注ぐ。

送られて来た荷物の中には、洋一どころか真奈美が注文した物ですらない、まったく別の品が梱包されていた。

先程とは異なる配送業者が「武藤 真奈美」宛の荷を抱えて呼び鈴を鳴らしたのは、洋一が慌てて送り状の宛名を確認した時と、ほぼ同時であった。

（あれが、ただの荷物だったら……こんな大事にはなっていないかった）

奇しくも同じ日に、同じ通販会社から届けられた「武藤 響子」宛のダンボールに入っていた物は、洋一の平穩を激しく掻き乱した。

アダルトグッズ——それも、コンドームやローションといった、セックスで用いら

れる消耗品の類ではない。パイプやローターといった、明らかに自慰を目的として品が詰め込まれていた。

響子の秘密を知って動転する洋一だったが、小手先の嘘や言い訳が通じない相手であると、長年の経験を通してすっかり身に染みている。むしろ、根は生真面目な真奈美の母親だけあって、その手の小賢しい責任逃れには殊の外厳しい。

下手な細工を弄さず、包み隠すことなくメールで一連の事態を報告すると「仕事が終わったら二人きりで話合いますよ」と背筋の冷える返信が戻ってくる。

文中に密会場所として指定されていたのが、この人気の消えた臨海公園だった。

「洋一君のメールを読んでから、今日は仕事が手に付かなかったわ。あり得ないケアレスミスを頻発させたから、同僚達から本気で体調を心配されちゃった」

「ご、ごめんなさいっ」

暫しの沈黙の後、響子は感情の読み取れない淡々とした独白を紡いでいく。

単にミスという言葉に集約してくれているが、そこには間違いではすまされない業務も当然含まれていると見るべきだろう。

そんなことはまだ未成年の男子高校生でも判然とするだけに、洋一は再び風を切る勢いで頭を下げた。

「洋一君、謝る時は誠意を込めて一度だけ謝りなさい。二回、三回と続けると、その数を分母にして相手は謝意を希釈してしまうわ」

「う、うん……あ、いや……はい」

手心を加えない響子の辛辣な指摘が、平身低頭なれど社会常識の希薄な未成年の態度を改めさせた。物音が遮蔽された車内だけに、心臓の音がやけに大きく洋一の鼓膜を叩く。

（おばさんは綺麗だけど……やっぱり叱る時は無茶苦茶おつかない……）

ヒステリックに叫ぶ女と異なり、響子は怒ると声を凍らせて真正面から相手の非に切り込んでくる。子供の頃と違い、身長は追い越して腕っ節など比較にならない成長を遂げていても、三十八歳の美熟女にはまったく反抗できない。

これ以上、不誠実な男と見られないよう、洋一は口を噤んで背筋を伸ばす。

目を逸らしたくなる衝動を抑えて、美しく、畏敬すべき年上の美女を真っ直ぐに見つめる。普段のタメ口も自粛し、洋一は改めて謝罪の意を響子に示した。

「親しき仲にも礼儀あり——ね。でも、洋一君は家族も同然だもの。そんな畏まって他人行儀な喋り方されると悲しいわ。それに——」

無感情だった響子の表情に、僅かな微笑みが浮かんだ。

「あんな言い方したら、何度も謝るしかないわよね。我ながら、大人げなかったわ。

ごめんね、洋一君」

「いや、だって……悪いのは俺だし——あ」

そもそも、今回の事態は洋一にすべての原因がある。響子が頭を垂れるというのは筋違いだ。幼馴染みの母親を慌ててフォロウするものの、洋一の頭をふんわりと撫でるしなやかな指が、後に続く言葉を打ち消した。

（おばさんに撫でられるなんて、何年ぶりだろう）

悪ガキだった時分には、くだらなくも馬鹿げた愚行を重ね、何度も響子に叱られたものだ。それでいて、しっかりと反省をすると、響子は必ずこうして優しく頭を撫でてくれた。

高校二年生となっていよいよ大人たらしんとする洋一だが、響子にこうして愛撫されると安堵と気恥ずかしさで、子供の頃と同じく何も出来なくなってしまう。身長を追い越し、筋肉質な体格になって響子を見下ろしていても、こればかりは不変だった。

甘く熟れた女の香りが、ふわりと鼻梁を撫でた。

「秘密を知られたのはショックだったけれど、相手が洋一君なだけまだマシだったかもね。うちの子達に見られたら、母親としての威厳なんて失墜するもの」

気丈に振る舞ってはいるものの、仕事で失態を頻発させただけあって、内心では相
当に動揺していたのだろう。

洋一を許して力が抜けてしまったのか。美しいキャリアウーマンの声からは、否応
なしに緊迫感を惹起させる張りが褪せていた。

「それは絶対に無いって。あの二人、おばさんを凄く尊敬してる」

悄然とした響子を鼓舞する洋一だが、これはその場しのぎの取り繕いではない。事
実、真奈美とその姉の桃香は、響子に対する陰口を叩いたことは一度もない。

響子はたった一人で武藤家を支え、忙殺されながらも家庭では母親としての責を果
たしていたのだ。これだけの美貌とキャリアを持ちながらも、これまで浮いた話一つ
ないのが、逆に娘達を心配させていたくらいだ。

「若い子ならとにかく、自立して、娘もいる大人の女が、玩具に頼って自分を慰めて
いたのよ。洋一君だって、軽蔑したでしょ」

「そりゃ、驚きはしたよ。けど、誰にだって性欲はあるから、アダルトグッズでオナ
ニーするくらいで軽蔑なんてしない」

美熟女に似付かわしくない湿っぽい愚痴を真っ向から否定する。

故意ではないとはいえ、自分のミスで響子の矜持や誇りを傷つけてしまったのが、

洋一は許せない。

いつもの毅然とした美しさを湛える姿に立ち直って貰うべく、洋一は必死になって
響子の淫らな独り遊びを肯定した。

「俺だって……その、たまにはオナニーだってするんだし」

「えっ……ちよつと待って洋一君。真奈美とセックスしているのに……どうしてオナ
ニーなんてするの」

響子の柳眉が跳ねた。誰もが性欲を持っている実例として、自分の自慰行為を吐露
した洋一だが、意図した点と異なる部分に幼馴染みの母が焦点を当ててくる。

「どうして……あいつが生理の時はエッチはできないし、お互い時間が合わなく
てムラムラしてきたら、一人でオナニーするしかないから」

「生理って言っても、一週間くらいじゃない。たったそれだけなのに、我慢できない
ものなの」

響子が目を丸くして洋一の顔を覗き込む。それは決して男の度し難い穢欲を非難す
るものではなく、純粹な好奇から来るものだ。

（おばさんのところは女しかないし……確か、姉妹はいるけれど男兄弟はいないっ
て聞いたことがあるな）

響子は男女の性にとでも理解を示してくれる。しかし、それはあくまで両の性がセックスになったセックスのみに対してであって、男の性とその衝動については、殆ど知らないらしい。

キャリアウーマンとはいえ、男の自慰行為については座学で習うこともないだろうし、ましてや女しか居ない家族では母として男の性を調べる必要も無い。

そう考えれば、洋一の旺盛な性欲に響子が驚くのも不思議ではなかった。

「俺と同じ年齢の男子なら、一週間どころか一日射精を我慢するのも難しいって。セックスしていない日は、代わりにオナニーしまくっているよ」

やや過剰な表現をするものの、大筋では間違っていない。洋一と同年齢でほぼ毎日セックスしている者は滅多にいないだろうが、同級生達が自慰のオカズを友人間でやりとりするのは日常茶飯事だ。

これは、セックスフレンドのいる洋一とて例外ではない。自慰行為は男子高生のライフスタイルの一つといっても、そう過言では無いだろう。

（ここまで教えるのは恥ずかしいけれど……俺が全部悪いからな）

青少年達の表沙汰に出来ない性事情を、洋一は一気にぶちまける。

ケダモノといっても差し支えない男の卑しい性欲を晒せば、アダルトグッズで淫戯

に耽っていた響子も、それなりに気負いが無くなるだろう。

響子が元気を取り戻してくれるのなら、洋一は己の恥部を詳らかにするのも吝かではなかった。

「ふうん……そう、なのね」

洋一の性生活を聞き終えた響子は、視線をフロントガラスに向けるとそのまま小さく俯き、頤に白い指先を引っ掛ける。響子が何かしらの思案をする際のクセだ。

性癖への自虐を考え直していると見た洋一は、含羞を見返りとして功を奏したと確信し、胸中で作りあげた拳をグツと握り締めた。

「ねえ、洋一君。一応今回のミスは許してあげたけれど、これって私だけが一方的に損していると思わないかしら」

「——えっ。あ、うん」

だからこそ、響子から紡がれた有無を言わせぬ追求は、暫しの間、洋一から思考する力を奪った。

（あれ……俺、何かマズイこと言ったのか）

不穏な会話の流れに、赦免された安堵が急速に薄れていく。響子が終わった話を蒸し返すなど、洋一は一度も直面したことがない。

不気味な焦燥感がわかにかに心底で蠢いた。

「本当はこんなこと言いたくないけれど……洋一君、本当に悪いことをしたって思ってる？ 私がどれだけ恥ずかしい思いをしたのか、想像できているのかしら」

「も、勿論だよ。俺だって、同じ立場になったらすげえ落ち込んでるって」

一度納められた矛先が勢いを取り戻し、再び洋一の正面に突きつけられた。当惑を覚えずにはいられない洋一だったが、憂慮すべきは我が身ではない。

（俺が逆の立場だったら、三日は飯が喉を通らないようなへまをやらかしちまったんだ。おばさんが納得できないのも、無理はないよな）

家族はおろか、本来ならば絶対に他人へ知られてはならない性癖を覗いてしまったのだ。幼馴染みの母親であり、厳しい反面息子のように可愛がってくれた年上の女性を傷つけた罪悪の念が、洋一の良心を責め立てる。

「俺、おばさんにはきちんと誠意を伝えたい。贖罪になるならどんなことでもさせて欲しい」

謝って許されるのは小学生までだと、洋一は考えている。義務教育を修了し、大人へ近付くための高等教育を受けている分際で、謝罪の意を唱えれば魔法のように許しが得られるなど思わない。

もう子供ではないと示すためにも、洋一は真摯に響子へと向かい合う。

「ふうん……そう。それなら——」

響子が僅かに身を乗り出した。真奈美とは似ても似つかない成熟した大人のフレグランスが、甘やかに洋一の鼻を擦った。

「洋一君のオナニー……私に見せてくれるかしら」

「それじゃ……始めるよ」

ズボンは当然として、トランクスとショートソックスも脱ぎ、下半身に身に着けていたすべての物を取り払ってから、洋一はベッドに腰を下ろす。

プロの技術が伺えるシワー一つなくメイクされたベッドシートが、直に尻肌へと接する。くすぐったい感触が皮膚を伝い、洋一は反射的に括約筋を締めた。

「ええ。それじゃ、洋一君の恥ずかしい自慰行為……じっくり見せて貰うわね」

ストールに座って膝を組んでいた響子が、ふとももに肘を着いてリラックスする。ナチュラルベージュのパンティストッキングが室内の照明を浴びて綺羅と輝いた。掌に頬を置いた美熟女は、ジッと洋一の股間へと焦点を合わせる。

(高校生にもなつて、おばさんからちんぼ見られるハメになるなんて)

道中、オカズとして購入した青年誌を左手に乗せた洋一は、だらしなく垂れ下がった陰茎を右の掌に収め、羞恥に頬を炙られていた。

「やっぱり、体付きだけじゃなくて、こんなところも大人になって来ているのね。昔は股間なんてツルツルだったのに、こんなに陰毛が繁っているなんて」

「ちよ…お、おばさん。あんまり余計な所は見ないで欲しい…：…んだけれど」

「あら、別に初めて裸を見られたわけじゃないでしょう。そんなに恥ずかしがるなんて…：…洋一君つたら、変な子ね」

「む、無茶苦茶言わないでくれよ。今と昔じゃ全然違うんだからさ」

幼児期には真奈美と一緒に風呂に入ったり、プールへ連れられて行った際、響子に局部を見られたものだが、昔と今では状況がまるで異なる。

おまけに、洋一と響子の相互認識には隔絶した違いが発生しているらしい。凶体は大きいくせに、羞恥に萎縮して身を縮こまらせる洋一が面白くて堪らないのか、響子は相好を崩してクスクスとまろやかに微笑む。

(真奈美の前で裸になるのは慣れてるが…：…おばさんを前にすると全然ダメだ)

セックスを日常的にしているだけに、幼馴染み前では平然と股間を露わにできるが、

響子の前では下着姿になるのすら躊躇ってしまう。まして、陰毛の生え具合をチェックされているのだから、恥ずかしがるというのが無理な注文だ。

(一刻も早く終わらせちまおう…：…そうすれば、おばさんも満足してくれるんだ)

これは贖罪なのだと言いかせ、洋一はまだ血の巡っていない肉棒を強引に揉み始めた。

「ふうん…：…指でクニクニつてすると、おちんちんが大きくなっていくのね」

「あ、ああ…：…うん。掌で握れるようになるまでは、こんな感じだよ」

勃起も満足にできていない状態では、肉竿を抜くこともままならない。男根が漲っていないれば手淫で付与される快楽などかが知れている。

洋一は親指を用いて、まだぶよぶよと柔らかい亀頭冠をゆっくり撫で回した。

(おばさんつて、やっぱり男のオナニーとか見たことないんだな)

男の自慰は彼女や伴侶がないことが大前提として行われるものだ。寡婦である響子に見る機会が無かったとしても不思議ではない。

そのためか、まだせんずりに耽る欲情すら淡く、遅々とした愛撫でしか無い洋一の一挙一動を、見逃すまいとするようにジッと観察してくる。

(死ぬほど恥ずかしい…：…ああ、クソ。早く射精して、終わらせたいつてのに)

さすがに響子の前で実^実娘^娘のハメ撮りを使うわけにはいかず、オカズとして購入した青年誌を改めて見つめ直す。際どくはだけたビキニをまとい、男を挑発する仕草をしたモデルが洋一の視界に映った。もつとも、それで響子から放たれる視線がカットされるはずもなく、自慰への没入が著しく阻害される。

なお悪いことに、購入した青年誌は厳選に厳選を重ねたわけではなく、急ごしらえかつ適当に選んだ品だ。別段好みのグラビアモデルが載っているわけでもないのに、肌を大胆に露出しているも肝心のエロティシズムを殆ど感じない。

結果、いい加減な色欲と半端な集中のせいでも、いくら刺激を与えても男根が猛々しい怒張へ変化する様子は無い。

(真奈美とオナニーを見せ合ったこともあるけれど……あの時とは、全然違う)

異性の前で自慰行為に耽るのは初めてではない。ただし、真奈美と淫らな独り遊びを見せ合った時は、少女の痴態をじっくりと眺められたからこそ、容易に興奮が湧き上がってきた。

洋一は他人に性行為を見られると興奮する等という、特殊な性癖を開花させているわけではないので、一方的に観察されるのは気分の盛り上がりには欠けること甚だしい。(それに……おばさんの脚がこんな近くにある)

洋一はグラビアに焦点を合わせつつ、視界の端に映った美脚へと意識を傾けた。

腰の位置が高い響子の美脚は、成熟した女の脂を乗せた柔らかな質感を帯びており、女の色気を存分に振りまいている。

青年誌に掲載された十代の水着姿のグラビアモデルや、健康美溢れる真奈美の脚とはまったく異なる魅力を持った三十路の媚脚。むっちりとした脚肉は煌びやかな光沢を宿したパンテイスティングによって引き締められ、艶やかな稜線を描き出していた。

タイトスカートから伸びた響子の脚線は、実りの無い自慰行為を更に惑わせる。

(こんなこと思っちゃいけないが……おばさんの脚、エロ過ぎだろ)

色に溢れ返った女の媚脚が、男子高校生の胸中を卑しい情欲に駆り立てる。

身内最良ならぬ御近所最良を抜きにしても、響子は男を魅了する身体を持ち主だ。

牡としての性に目覚めてから、洋一は響子の肢体がどれだけ濃密な色を孕んでいるか、嫌というほど思い知らされている。

(おばさんを、こんな目で見ちゃいけないってことはわかってる)

身近で、幼馴染みの母親に欲情していると自覚した時は、酷い自己嫌悪に陥ったものだ。なまじ小さい頃から可愛がられているだけに、響子に肉欲を抱くのは酷い裏切

りに感じた。

(クソ……こんな辛いオナニー、初めてだ)

視界に美熟女の脚がちらつけば、その度ごとに強い自制心が性欲を抑え込む。それは、洋一のオナニーをより阻害し、射精衝動に強烈な抑制をかけた。

これが響子への贖罪であるため止めることも逃げることもできず、洋一は悩ましい衝動に煩悶する。

「洋一君のおちんちんって、思ったより大きくなるのに時間がかかるのね。若い子ならもっと早く勃起するのかな、って思っていたんだけど」

そんな洋一の倫理事情と生理事情を知らない響子は、さらりと辛辣な感想を述べる。「い、いや。違うよ。いつもはもっとすぐデカくなってるんだ」

響子に他意が無いのは明白だが、さすがに高校二年生で勃起不全だと思われてはたまらない。洋一は慌てて首を横に振り、我が身の壮健ぶりをアピールする。

「普段なら、もうとっくに勃起してる。でも、やっぱりおばさんに見られていると、なんだか落ち着かなくて……」

「そっか……洋一君がここまで恥ずかしがるなんて、ちよつと予想外だったわね」

「あ、その……うん」

十代特有の繊細さを慮ってくれたらしいが、どうも響子は洋一がいったばしの男性であるという認識にまだ達していない。

なまじ、第二の母といっても過言では無いくらい面倒を見て貰ったのだ。満十七歳となつている洋一だが、響子の中では全裸でも抵抗がなかった腕白坊主の面影が、未だに尾を引いているのは明白である。

「あ、そうだ。良いことを思いついたわ」

やや見当がずれているものの、どうすれば洋一の自慰行為をスムーズに行えるか考えていたのだろう。ペニスから視線を外し、宛てもなく中空を彷徨っていた黒い瞳がパツと輝いた。

「良いこと——って、何？」

ひよつとしたらこの苦悶だらけの自慰観賞を取りやめてくれるのか——と、淡い期待が洋一の脳裏をかすめる。

小さく微笑んだ響子がストールから軽やかに腰を上げる。むっちりとした艶脚が色を帯びた曲線を描き、パンティストッキングが妖しげに煌めいた。

洋一の正面から、たおやかな指がスツと差し伸ばされる。

「えっ——わっ」

繊細な女の指はしかし、洋一の苦境を救うことはなく、そのまま肩を押した。

片手に青年誌、片手に陰茎を収めていたため、上体を安定させようとやや猫背になっていた洋一だが、響子が立つのに合わせて視線が上向きに引き上げられている。

追従して伸びた背から重心がずれた瞬間では、どんな弱い力でも背筋を崩せてしまう。結果、体軀では遥かに勝る少年は、呆気なく美熟女の手によって仰向けに転がされた。

「おぼさ——」

「いいから、そのまま居なさい」

反射的に起き上がろうとする洋一に、びんと伸ばされた響子の人差し指が向けられる。浮きかけた後頭部が、再びシートへと沈められた。

洋一が素直に従うと響子は「良い子ね」と、二人の母に相応しく、それでいて背徳の場に馴染まない柔らかな笑みを零した。

「見られて緊張しているなら、私が顔を背ければいいのよね」

ベッドの縁に響子の膝が載せられる。白い指がふくらはぎから踵に沿い、ヒールパンプスが床に落とされた。靴に隠されていた三十八歳の足先が、ストッキングに透けて蠢惑の輝きを放つ。

「でも、顔を逸らしたら、洋一君のオナニーが見られなくなってしまふ……それなら、こうすればどうかしら」

膝立ちのまま洋一の腰を跨いだ響子が、身を屈めてなだらかな背を見せる。

（おぼさん、俺の腰に跨ろうとしている）

響子の意図を把握した洋一は、透過な化繊に彩られた膝窩からふくらはぎを、舐めるように凝視する。ごくりと音を立てて呑まれた唾は、焼け付くように渴いた喉に痛みを伴って染み渡った。

響子は洋一の自慰を見たい。

洋一は響子に自慰を見られたくない。

相反する欲求を妥結させるとしたら、響子が自慰を見られる場所に移動することで、洋一と視点を合わせなくするしかない。

妥協を充たす場所は、洋一の腰で馬乗りになるだけだ。

（おぼさんの下半身が、俺の上に……）

タイトスカートにびったりと彩られた媚臀と、三十路の艶脂が溶け込んだむっちりとした美脚が、洋一の下腹を跨ごうとしている。

スカート越しであろうとも、美熟女の魅惑溢れる豊尻が密着しようとしているのだ。

男子高校生の健全な肉欲が、大きく鼓動を鳴らす。

響子が背を向けたのをチャンスとばかりに、もつとこの熟れた肢体を視姦しろと牡の本能が叫ぶ。

(ああ、クソッ。見るな……見ちゃダメだ。相手は、おばさんなんだぞ)

下劣極まり無い衝動を何とか克己すべく、洋一は苦渋の思いで張り詰めたスカートから目を逸らした。

「お、おばさんっ。何を——」

「何って、このまま腰を降ろしたら、スカートが洋一君のおちんちんを隠しちゃうでしょう？」

響子は両手でスカートの裾を掴むと、そのまま躊躇いなく擦り上げていく。

スカートの中に隠されていた肉感豊かなふとももが、惜しげもなく露わとなった。

本来ならば見えてはならない、パンティストッキングのランガードが貌を見せ、男の網膜に色濃く焼き付く。

洋一の決心は、数秒と経たずに崩壊を余儀なくされた。

「幾らスリットが入っていてもタイトスカートですもの。こうやってたくし上げないと腰は降ろせないわ」

洋一が惑乱を顔面に舞わせているのが面白いのか、響子が紅唇を綻ばす。

一旦止まっていた女の手が再び動き出した。短いランガードが途切れると臀肉の盛り上がりがむちつと張り出し、魅惑の薄布が露出されていく。

(おばさんのショーツが、パンスト越しに……)

ナチュラルベージュのパンティストッキングに透かされた、アイボリーブラックのハーフバックショーツ。

装飾性に乏しくシンプルな実用性を優先した真奈美とは異なり、響子は大人の女であることを誇示するように妖艶な色合いで股座を彩っていた。

無数のレースが咲く華美なショーツには、女子高生の幼馴染みとは一線を画した、オフィスレディの色気が内包されている。

「だらしない姿を見せちゃうけれど、これも洋一君のオナニーを邪魔しないためだから……我慢してくれるかしら」

「う、うん……」

激しい動揺に苛まれる洋一とは対照的に、響子は年上の余裕を感じさせるゆつたりとした手付きで、捲り上げたタイトスカートでベルトを隠す。

二人の娘を生んだとは思えない媚臀の全景が露わになり、パンティストッキングの

ウエストテープが下半身の境界線を引いた。

「それじゃ、洋一君のお股に座らせて貰うわね」

膝がゆっくりと折られ、豊満な双臀が眼窩へと迫ってくる。肉感の溢れたふとももが伸ばされ、追従して引き延ばされたショーツがびっちり尻肌を覆う。

センターシームが臀裂に沿って延伸した。崩された膝がベッドに着き、ヌードトウの爪先が足裏と共に反転する。

響子の艶熟した下半身が、洋一の下腹へしつとりと載せられた。尻肌の温かみと柔らかにたわんだ臀肉が、官能の柔らかさを洋一に浴びせ掛ける。

「こんなことした後で聞くのも変だけれど……洋一君、大丈夫？ 重くないかしら」

「あ、ああ、うん。ほら、俺って部活が部活だから身体鍛えてるし、このくらいなら全然平気だよ」

見返った響子の不安を洋一はすぐさま払拭にかかった。

洋一は背丈に恵まれているし、何より体軀や筋肉の付き方が女とは根本から異なっている。体育会系のバスケット部は身体の発育を後押ししてくれているし、それとは別個に真奈美と充実したセックスライフを送るため、腹筋のトレーニングには余念がない。加えて、セックスの際にはサディスティックに女を責める傾向があるため、どんな

体位でもこなせるよう身体は満遍なく鍛えてある。

（おぼさんの身体ってむっちりした肉感があるけれど、女だから見た目よりずっと軽いんだな）

最初に真奈美を抱いた際は、女体のあまりの軽さに随分と驚いたものだ。

ついでに言えば、響子の体重は折り曲げられた脚に分散されているので、女の矜恃にかかわる懸念など、まったくの杞憂と言える。

「良かったわ。重いつて言われたら、どうしようと思っちゃった」

洋一に平然とショーツを見せることは出来ても、体重は別の問題のようだった。

母親として落ち着きがあり、こうして洋一を手玉に取っているが、響子も女である限り内心はかなり気になっていたらしい。

洋一が即座に否定すると、如実に安堵の溜息を吐いた。

（体重のことよりも……こんな間近におぼさんの尻がある方がよっぽど問題だ）

もつとも、響子が重い軽いなどといった話は些末な問題だった。腕を伸ばすどころか、手を動かせば触れられる距離に経産婦とは思えない魅惑の女尻がある。三十路の艶臀は真奈美より一回りは大きく、爛熟した牝であると暗黙裏に女体がアピールしていた。

(何てエロい尻なんだ。このデカ尻を思いつきり挿んで揉み捲りたい)

響子の顔が見えないだけに、熟した臀肉は牡の獣性を唆す。洋一のサディステイックな性癖が劣情を煽り立て、熟した臀肉にしゃぶりつけとがなり立てる。

(ダメだ…：もう、こんなどうでもいいグラビアなんか見てられるか)

旺盛な性欲を裡に秘めた高校二年生が、極上の媚臀から目を離すなど生殺しの極みだ。響子がこちらを見ていないことを確かめ、洋一は肉の熟桃を視姦する。

途端、これまで自制を強いてきた反動とばかりに、むくむくと男根が膨張し、あつと言う間に硬い卑柱へと変化した。

〈体験版終了〉